



鼎  
 歌  
 經  
 考  
 鴻  
 發  
 句  
 集  
 三  
 編  
 坤



^ 5  
 2171  
 2





半日菴芳律編

俳諧新選年浪發句集三編 二冊 乾坤

東京香同社蔵棟



新選年浪發句集三編

下の巻

半日庵芳律選  
荑菴庵文禮校  
一具庵尋香園

閑居立帖

帖立中	未	伸	さ	う	な	巾	の	親	大	飯	嘗	笠			
手	深	き	恒	糸	巾	帖	の	と	日	之	世	岩	代	有	儀
帳	立	巾	の	半	を	何	の	せ	陸	中	香	峰			
人	病	の	如	座	も	帖	立	あ	上	毛	吳	羊			
階	立	巾	の	楯	巾	帖	立	巾	羽	前	文	園			
帖	立	巾	の	と	ら	力	な	ら	羽	後	喧	風			

秋直や双葉の人の居る小家 豊前 未曉  
 湯のぬる音うら 因幡 黙史  
 立秋や静好しの心より 東京 雲也  
 秋直―心や高くと快心 東京 尋香  
 家風の門うら秋の立ちゆく 東京 柵言  
 泣き―や秋直室を小急より 東京 法ら  
 秋の来―音なき戸の風を 東京 若葉  
 悔直や隣の前―ききまわれ家 東京 子  
 秋直―くある音も秋の立ちゆく 善徳男 整一  
 清く―候も秋直の灯 善徳男 芳緯  
 初涼 善徳男  
 る止候と―るる涼―朝暮 上七 歳琴

吹降て初々 善徳男 空の色 近山  
 奇くある初々 善徳男 竹柱 武彦宗 文禮  
 是き―は―るる涼 帷の裾 羽前 五生  
 野―ら来て初々 善徳男 楓の風 羽後 月静  
 月―――るる涼 美葛系 善徳男 風好  
 予直―初々 善徳男 夕菰波 善徳男 蘭雨  
 窓――月や初々 善徳男 き新 善徳男 法梧  
 森近れハ初々 善徳男 秋風の浪 善徳男 杉風  
 月の匂―は―るる涼 善徳男 三笠 善徳男 風系  
 故屋初ら傳来る 善徳男 初々 善徳男 霧川  
 是降の――るる涼 善徳男 湖の面 善徳男 霧峰  
 人々来て初々 善徳男 町中 善徳男 嗟風

洩る風は初て涼 掛 簾 羽後 本  
 さらさらと初てま 袖の浦 豊前 花 雄  
 森廻りともまを原 澄の音 豊前 聴 翠  
 悠々たりと初てま 坊泊り 東京 黙 史  
 屏心も初てま 田子の浦 松 琴  
 不二とまを初てま 山泊り 才 仙  
 明後のもまを原 本音の旅 蘭 子 芳  
 眼も耳も初てま 池の水 芳 翁  
 漣のまを初てま 旅の衣 蘭 亭  
 從つて初てま 旅の衣 蘭 亭  
 雨霧  
 見初るすや里に蓋 一とやうな霧 行 露  
 蘭 亭

芳の香や 油大木の音をま 豊後 淇 園  
 をくくらの芳の味もや 香のま 豊前 曲 眩  
 芳は香や 谷添道の 橋上り 紀行 幽 岱  
 下宿の薪の明もや 芳の海と山 越後 室 海  
 岸の香の画小能く似たり 芳の松 大 和  
 芳とれと漣のたけ 湖の水も 信濃 逸 氷  
 霧深き 舟や 旅籠を互初れ 上 毛 我  
 舟の香の中より 芳の 日如風 几 事  
 別掃る 燭の 芳の 晴 月  
 芳の香や 燭のまを 臨むとら 霧 琴  
 所城のえ 橋のまを 芳の味もま 柳 下  
 温泉煙りを 初てま 芳の味もま 柳 下

音の中  
 音源  
 同  
 上  
 香  
 五月  
 音  
 生  
 香  
 梅  
 元  
 常陸  
 如  
 風  
 武  
 山  
 十  
 松  
 東  
 京  
 身  
 松  
 松  
 山  
 秀  
 谷

音の中  
 音源  
 同  
 上  
 香  
 五月  
 音  
 生  
 香  
 梅  
 元  
 常陸  
 如  
 風  
 武  
 山  
 十  
 松  
 東  
 京  
 身  
 松  
 松  
 山  
 秀  
 谷

秋の蝶

巽城  
 古  
 仙  
 左

秋の蝶 垣邊を 念もなかりけり  
 何れも 身才の上を 秋の蝶  
 磯道や うらまは 悔は蝶  
 眠つては 是れを 夢も秋の蝶  
 川舟の 帆も 是れを 秋の蝶  
 近之 舟まら 出の力や 秋の蝶  
 蝶々や 福も 日知の 蝶々 秋  
 春も 丸い 蝶々 是れを 秋の蝶  
 我々も 吹く 風を 是れを 秋の蝶  
 何れも 日御の 早し 秋の蝶  
 晴る 日も 是れを 秋の蝶  
 夕也 是れを 蝶々 是れを 秋の蝶

羽後 貞 年  
 以 蝶 我  
 信 濃 軒 走 好 孝 箕  
 上 毛 勝 以 以  
 常 陸 左 勝 以  
 但 馬 熊 扇 泉 扇  
 越 後 淇 園 園 泉 扇

秋の蝶 人さし 是れを 秋の蝶  
 安も 力似 好相 是れを 秋の蝶  
 舞う 是れを 秋の蝶  
 秋の蝶 是れを 秋の蝶  
 是れを 秋の蝶  
 是れを 秋の蝶  
 是れを 秋の蝶  
 是れを 秋の蝶  
 是れを 秋の蝶  
 是れを 秋の蝶

周 防 歳 年  
 豊 前 梧 栖  
 吳 地 黙 史 曉  
 伊 豫 碧 雲 鶴  
 東 京 申 國 溪  
 小 其 尤 國 溪  
 酒 他 核 尤 國 溪  
 言 相 他 核 尤 國 溪

風なりは吹くも秋の夜鳴き  
吹きわたる音もさきも秋の蝶  
牡丹咲く時よは海は傳悔は蝶

秋 憚

美うれて吹くもなれ候 秋の憚  
おもひ付くやうに鳴くも悔はせし  
昔のふらふらとくも秋の憚  
蜀黍の音も鳴くも秋の憚  
結上を啼くも 秋の憚  
鳴くも傳はる形もさきも秋の憚  
落しつゝの松穂傳はる 秋の憚

秋の故

松 琴  
ト 子  
芳 律

信 康  
如 鳳  
三 都 里

東 京  
文 園  
子 郎

秀 子  
岳 仙  
芳 律

秋の竹は鳴くも傳はるも 樹の松  
候は竹も響くも、さきも音のつら  
秋の蚊は耳をさくも、旅もさき  
鳴るも、秋の蕪竹もさきも、  
夕さねる秋の音も、飛竹も、  
秋の竹は忘れ、はなみ、  
候は故の音も、あや、秋の寂  
秋の蚊は、おもひ、秋の曲は、  
秋の竹は、人、秋の竹は、  
秋の竹は、秋の竹は、  
秋の竹は、秋の竹は、  
秋の竹は、秋の竹は、

同 幡  
櫛 外  
素 梅  
芝 山  
逸 氷  
扇 風  
嘉 峰  
五 川  
善 生  
方 我  
方 山  
竹 風  
寸 芳

強々抄や追ひ度されしまゝに  
焼く抄や一筆の田をそれたるまゝに

秋茄子

秋も又の盛りのある茄子の事  
買ふと多くは橋の子籠や秋茄子  
秋もとや茄子をなまなりしり  
赤く秋を盛る小寺の茄子の事  
秋茄子や秋のまじりの其の物  
小まじりたる言はれし秋茄子  
秋布や箱の色をまじり秋茄子  
一番の抄りぬ粒や秋のまじり  
焼く汁も味の抄りたる秋茄子

文 禮  
芳 律  
茶 亭  
文 園  
紫 琴  
好 山  
里 山  
常 陸  
白 水  
上 石

撰りたるせぬも秋の茄子の事  
不二の言はれし秋茄子の事

孟蘭盆

孟蘭盆やうの観持 果報者  
うら盆や秋のうら盆の事  
孟蘭盆や子の事やうら盆の事  
盆をれや善ぬ小島の灯の事  
大の盆の箱を掃りて盆用意  
盆の色や盆の事やうら盆の事  
傾城の盆の事やうら盆の事  
孟蘭盆や脂を掃りて盆用意  
盆の月の子の事や盆の事

風 一  
芳 律  
知 有  
蓮 史  
作 吟  
凌 雨  
一 魯  
士 行  
嶽 琴  
上 石  
點 史



盆火灯の物や喜屋の裏屋又  
くら盆や盆舟掛 盆の音  
徒然や盆茶盆の音 盆の音  
盆茶盆や古風と身も老来婦 東京  
近道をゆつてゆくの 盆の音  
盆茶盆や盆茶盆の音 道は連  
盆茶盆の音 盆茶盆の音 盆茶盆の音  
人の物とらせし掛 盆の音

拵待

拵待や字海の泊りおもしろき  
拵待や杖ついで来る人あき  
拵待や心ありあき大の歌

常陸 芳文 尋小 私出 眠黙  
東 樵 泉 律 禮 香 檜 淑 悠 文

拵待や盆の舟とて盆 西風  
拵待や知らぬ人き待好所す  
拵待や水汲む候も初より前  
拵待やあきと盆の人通る  
せら待や盆道を人あきうた  
拵待や盆石名もあき 畑分限  
拵待や町と盆所のこころは道  
拵待や尾の町もあき 袖  
逆少なる道もあき 門茶盆  
拵待の茶も盆茶を忘れり  
拵待や知らぬ人の馴れ

羽後 梅 枅 月 蘭 一 羽前 如 卓 几 夕 未  
泉 扇 昇 律 禮 香 檜 淑 悠 文

檜待やまのこゝろ意を寄る神も  
せら待や情の人の為ならん  
檜待の家や日ほくはくまや  
檜待やあひもあらぬ人のあき  
せら待の門や素も招くま  
松新や檜待らうき柱連

焼米

焼米のやたのの体さうれい  
焼米のや先あ堵せし家月  
やまのや都の人かき夜  
焼米のや結きし年柄の香る  
焼米のやあし好い新もまぬ

江

春

松

琴

芳

文

禮

喧

鶴

凄

貫

山

焼米のや神小佛よ先親下  
やまのや香の芳き梓の音  
焼米のや今さし焼舟の物  
焼米のやけいさし降つた  
焼米のや留守仕遊子の獲  
焼米の是もあや着加楨  
やまのやいさしたる送物  
焼米の薫りもゆるし玉子紙  
焼米の下力の是らぬ入齋  
焼米のゆるしなを益の上  
焼米の福守の楯よしら  
やまのやゆるしなを盤舞

雄

溪

國

栖

史

肱

年

桂

人

松

声

上毛 東京

焼米やまの白ひそ 刻の風味  
焼米の粒 ころほき 叫の字  
ゆき米や 心の長に 旅もを  
焼米の質 ころほき 白ひうた

相撲

勝相撲 月を 國廟 登り くらり  
皆 移り 刻 ころほき 角力  
水入れ して 足力 の 増え 角 触る  
原 あり ころほき 相撲 角力  
中 ころほき 物 忘 ころほき 相撲 角力  
生れ ころほき 家 忘 ころほき 相撲 角力  
勝 ころほき 斗り 叫 ころほき 相撲 角力

下

一 章  
松 琴  
電 丈  
芳 律  
葦 翁  
舌 翁  
汲 古  
竹 の 翁  
柳 官  
寸 芳  
小 機

土地の名を 付て 恥を 勝角力  
原 ころほき ころほき ころほき 実 相撲  
叫 ころほき ころほき ころほき 相撲 角力  
原 ころほき ころほき ころほき 実 相撲  
ころほき ころほき ころほき 相撲 角力  
勝 角力 元の 柔 相撲 子 ころほき ころほき  
指 ころほき ころほき ころほき 相撲 角力  
引 組 借 料 分 別 ころほき 相撲 角力  
最 ころほき 相撲 ころほき ころほき 相撲 角力  
原 ころほき 勝 ころほき ころほき 相撲 角力  
米 の 價 ころほき ころほき ころほき 相撲 角力  
ころほき ころほき ころほき 相撲 角力

羽後

伊豫

市 仙  
善 我  
几 堂  
空 海  
蛤 泉  
吳 官  
左 官  
崎 翁  
晚 翁  
曲 翁  
淇 翁  
松 翁

其母の歌よも此夫角力元  
畔を和角力崩れぬう初りり  
弟に家習とらせむ角力取

羽衣橋

里山  
文禮  
芳律

古戦場歌

久々通る袖も落るく一の谷  
歌き川中流る河多事  
よあ〜如鏡〜あ〜や歌の音  
大由戸力小多子歌のさ〜る  
橋井の昔をさ〜む袖の歌  
あ〜るや小手指あ〜の歌  
歌を〜鳴る力強〜城の歌  
音あ〜る歌のい鳥の内裡如

陸中

唯風  
文園  
友山  
祥松  
の鼻  
逸水  
吳宮

袖を度る置置の山や松の歌  
栗津地や袖をあ〜る歌  
最力歌原〜音地の内裡如  
あ〜る〜板火細〜聖の廣  
分入れの歌のめり〜楠橋音  
本音各や目いあり〜る歌  
長篠の歌のぬれり〜旅衣  
月より〜る塊の星の州の歌  
裏〜る〜る葛の歌の洞の嶽  
ち〜る歌の四條畷の小歌嵐  
栗津野や歌の深田の月のり  
三井の隆推の多音蘇れり

東京

梧栖  
左曉  
未史  
黙友  
梅友  
山の喬  
言の舎  
つら  
才芳  
左  
秀谷  
井の底

眼も余る露の光りや園の系  
菅笠の重く露降り久我繩子  
楠の葉ちりり光りを溪川  
消しあとの露踏とるんよりの山  
露深し露うし露の跡とやら

厚

初厂やまんを降せしあとの空  
番厂や月をす方一向きまゝ  
城をす霧のあつや厂のま  
眼も余る露の月影や厚の声  
園影もあつハ之をらハ天津厂  
まらり〜と露を再や厂のま

東京

下

瓢 其 芳 文 唯 赤 梧 木 凌 松  
洗 尤 翁 律 禮 風 峰 風 雨 雪

まらり〜厂やあまのま 露のま  
旅も程あふこをあれ厂のま  
厂啼や霧の冷通る舟の笛  
流れあを揚る露や厂の声  
厂通るあを和らむあ多 露  
月の厂空の度まを初はえらり  
厂四五羽来て別傷らふ田の月  
厚啼や霧の深まを露踏あ  
燃葉の船の葉火や厂のま  
立厚も動きやまらん露のま  
夏〜と進むや〜を堅田のあらす厂  
厂鳴や捲て初はれ好露の穴

羽前

桂 蓮 梅 几 歳 淇 芒 晚 曲 吳 全 全  
月 史 元 寺 琴 園 山 翠 肱 言

朱の岸や見るもよと船  
層の朱より袖は廣く是より  
其歌の所一き夕や層の  
厂啼や去年の夕より一多  
机の輪を漕りて高し一  
層の所一塔煙く煙り細く  
厂啼や舞麗き一冷麻継

海音

年よりある増減やとくも  
袖より子も昔より日あり一  
婦一若んもも層の也一  
藤より竹葉く煙りふむせ

紫 筒 蛸 機 井 蘭 芳 友 香 寄 梧  
多 溪 泉 外 風 子 律 山 峰 川 栖

多層の時を灘をる 帆物一  
川船より一答の交りやとくも  
海より来るもも 羽凡も時を  
海山も昔より日あり一  
色もや昔よりとくも一  
海より来るもも 離れに空や  
如れ帆より一海の目如やとくも  
海山も昔よりとくも一  
朱の岸や見るもよと船

鳩吹

鳩吹や 朱の岸より一  
とくもよと船

點 庫 孤 小 汲 全 真 文 芳  
史 文 峰 峯 舟 古 松 松 禮 祥 風 啼 席

海音

山道中 鳩吹う〜人〜  
鳩吹の邊り〜  
鳩吹や天童上合もあふ柳子  
は〜吹や〜  
鳩吹や日の暮とや杉林  
鳩吹〜  
鳩吹の枝道〜  
鳩吹や江山里の〜  
は〜吹や〜  
鳩吹の〜

山道中

高橋 一風  
里山 五生  
士行 玉桂  
如身 如身  
歳身 歳身  
黙文 黙文  
晚翠 晚翠  
曲肱 曲肱  
東京 東京

鳩吹の〜  
鳩吹の〜  
鳩吹の〜  
鳩吹の〜  
鳩吹の〜

洪結

玉川の〜  
とや結も〜  
松結や水不〜  
人も結も〜  
水沈借り〜  
月の色結〜  
多喜結〜  
新〜

陸中

寸古 芳古  
寸古 芳古  
朗山 朗山  
真茶 真茶  
一蘭 一蘭  
士行 士行  
儿童 儿童  
徳山 徳山  
香 香

淡船や海のやうな水の色  
水底の灯のまじりて、船のひる  
浪あややとらねてまとも船底の水  
浪船や水まじりて、浪のひる  
あつた浪のまじりて、船のひる  
舟中山のまじりて、船のひる  
まじりて、舟のひる

苔

夕景や苔の色をく日知色く  
灯のまじりて、舟のひる  
舟のまじりて、舟のひる  
舟のまじりて、舟のひる

申 有 山 園 文 禮  
知 有 山 園 文 禮  
以 本 文 禮  
朗 友 以 本 文 禮  
山 山 友 以 本 文 禮

何れもさや苔の色をく日知色く  
苔の色をく日知色く  
舟のまじりて、舟のひる  
舟のまじりて、舟のひる  
舟のまじりて、舟のひる  
舟のまじりて、舟のひる  
舟のまじりて、舟のひる  
舟のまじりて、舟のひる

芙蓉

切戸より裾底迄の芙蓉は  
静かきと芙蓉はたも芙蓉は

阜 未 檝 逸 蛸 寸 松 江 芳  
川 曉 外 水 泉 芳 淑 春 緯  
唯 峰 風 緯 春 淑 春 緯



庭の菊 芙蓉の 咲てゆく 花  
黄き 菊の 咲てゆく 花  
朝夕の 菊の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花

上松 芙蓉 文 祥 雙 湛 多 近 北 松  
風 常 風 白 園 松 松 園 我 山 川 友

東京

上松

解に 芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花

松 榴

芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花  
芙蓉の 咲てゆく 花

洞 後 淇 月 暈 携 几 送 白  
山 静 山 若 律 芳 方 香 牛  
水 氷 壺 扇 言 聲 山 律 山 若 風

上松

志く口を西日のぬく 松猫うね  
美のなしく梅少のあつるさくら

種 瓢

昔年家根り 庵井と名ぬ種瓢  
ゆれお存柳の鳴くくこ瓢  
長もゆさくらぬ河結や種ひさこ  
あふちのち柳の流るく種瓢  
柳ももる月影さく け種瓢  
千なりや具月さく種ひさこ  
きる光のちも書てあく種瓢  
鴨の首のさくく種瓢  
師匠のとちのさくく種ひさこ

涼 蒼  
芳 律

有 儀  
本 風  
如 風  
五 生  
逸 琴  
玉 水  
東 曉

葛あも葉もさひて月さや 種 瓢  
未生も 約束のあつるひさこ  
つるくも音くゆく 種ひさこ  
ちてゆさくゆく種瓢  
心も秋のさくく種瓢  
けくく煙くく種ひさこ  
世もくくあつてあく種瓢  
世もあつるささひさ座のひさ瓢  
家内中知らせてあや 種瓢  
誰う暇もあつてあく種瓢  
暮もささく世もあつて種瓢  
あつてあつて種瓢

白 水  
筒 溪  
梅 谷  
東 京  
品 海  
音 夕  
涼 蒼  
古 葉  
白 人  
芳 律  
文 禮

秋季恋

水の中を遊ぼうとあれて秋の夕  
夕顔の香気もほろほろと  
つれもなき昔を山のはらから  
娘もさかや今もあつたもみぢれ秋  
待てぬ露の音きくひびく  
結納の事でも鬼灯もどく  
毎をきくくうもあつた秋の風  
あつた秋の音もあつた  
身もあつた別れの時と陰の交  
待つ人のあつた

東京 原松  
左 文 我 禮  
右 岳 我 筆  
懸 史

長き秋もみぢく  
あつた秋の音もあつた  
夕顔の香気もほろほろと  
つれもなき昔を山のはらから  
娘もさかや今もあつたもみぢれ秋  
待てぬ露の音きくひびく  
結納の事でも鬼灯もどく  
毎をきくくうもあつた秋の風  
あつた秋の音もあつた  
身もあつた別れの時と陰の交  
待つ人のあつた

陸中 花扇  
右 申 國  
古 如 山  
桂 如 風  
如 如 月  
法 如 月  
真 如 月  
柳 如 月  
文 如 月  
禮 如 月

うらうの香の忘れぬはる扇の車

秋喜

月夜より新きくくちり好物能新  
筆の色を搦てる音は新きく  
灯火の煙のむく夜喜の車  
蹴おろす道のおくの秋喜の  
竹屋やめく高座のうら知る秋喜の  
客方灯のあつく物信の夜喜哉  
ぬれ著を脱ぎのうら新きく  
静無きと寝て知る夜喜哉  
さうくと竹のうら運ぶ秋喜の  
番少座の焚火のえきく夜喜の

初前

芳 律  
有 儀  
古 仙  
香 峰  
桂 月  
如 風  
一 香  
法 梧  
以 存  
梅 常  
聽 泉

月を潤る新きくくちり好物の完  
まゆの布 夜喜のまゆの星の照  
更くすく清く新きくの葉の車  
来る人を待てる水車新きく  
松風と耳の旅人の秋喜の  
裁ゆく柱の光の秋喜の  
おの家の一灯細き新きく  
やをさす形く酒試る夜喜の  
ゆの船のあつ小舟の秋喜の  
雲のゆきをゆる舟の秋喜の  
細くゆる水の音の夜喜の  
さうと竹のうら運ぶ秋喜の

常陸

祥 松  
空 海  
逸 水  
踏 泉  
申 國  
筒 溪  
呉 言  
未 曉  
晚 翠  
柳 元  
如 風  
近 山

以悦の雫れ眼もつゝ夜を  
墨をこぼる指よ是白の糸を  
鯉松子のより音も新を  
森の灯おすすわのこゆる夜を  
大勢にちつて高き新を  
懐く念の糸もや 浪の船より  
志向と知る夜をや月の夜より  
唐の悦も多くとけ 新を  
控られぬ猫の糸も夜を  
眠られぬ盆舞の糸も夜を  
ぬれぬ糸も如織の糸も夜を

念 何月

文 櫻 小 其 才 秀 蘭 芳 文 芳  
雅 棧 尤 芳 石 子 葉 文 律

東 京

丁 卯 年

念月中初めいすう 浪磨海  
為すも初らるる月よりすう  
晴夜や月の夕音ハ人おの  
松風を寝るてさう 三保の月  
待音や月より着くほ油を  
追つらん結の月を 初秋の浦  
松の葉も初るす月の 嵐 山  
官城野や 新のききり月を  
空林の結をらう やら月の  
武節野の念のききり月の 日中橋  
念月中はは 湖の 三井の 滝  
空林や田のよき年ハ月も

唯 真 赤 春 桂 唇 竹 友 逸 空 近 我  
風 来 峰 雨 月 橋 山 水 海 山 我

羽 城

橋立の松おひそまらりあけ月  
源らうねし月をたるとものなから  
名月や結し申出ある神楽の  
須磨寺や古ひあまの月とあり  
近きの子は輝きあけや源らの月  
いそ舟も月とて下せ亮上川  
五科や月もまをせたる昔昔の照  
活華江の月や船もよ泊り客  
源らうねし月もあけ源らの浦  
橋立や源らうねし月もあけ海  
源らうねし昔と活る月とてあ  
あもよし須磨の月とてあ海都右

下  
世  
五

芳 律  
我 琴  
洪 園  
檄 外  
杏 寺  
申 國  
未 院  
曲 腕  
點 史  
花 如  
片 如  
如 琴  
香 岩

玉川や磨くやうな月の照

竈馬

明家やととらねるの啼り  
音もくくまし心也や鳴電也  
好なりと行院まのりいこく  
すゆとねくろくあり鳴いさ  
きう海も雨やとさうり小唄竈出  
不のえらさる石燈籠やあけ心や  
燈を家や照の上も傳来る竈虫  
空家のねもやれり啼いとく  
きてきれ紙屑籠もよく寤也  
啼くいとくい合人の眠り

芳 律  
唯 風  
風 好  
梧 風  
秀 川  
素 白  
柳 下  
貞 奈  
本 風  
牛 吟  
士 行

まゝ知る 旅 舞のさし 一 帯りく  
ゆきし 時 けし 危人 掃也 こと せし こと  
桐 葉 大 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞  
物 是 ら 如 旅 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞  
啼 せん 傳 言 傳 言 傳 言 傳 言 傳 言  
徐 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
る 愛 こと 事 一 一 一 一 一 一 一 一  
る 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
後 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
花 葉 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

蠶 螂

鳩 橋 也 膝 立 たり 子 少 拾 たり 一

上 弦

以 文 芳 律 礼 文 牛 の 尾 涼 蕙 山 喬 涼 松 杏 琴 棋 園

鳩 橋 の た ち ま 一 一 一 一 一 一 一 一  
か ち ま 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
鳩 橋 の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
鳩 橋 や る の 一 一 一 一 一 一 一 一  
か ち ま 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
鳩 橋 や 風 子 一 一 一 一 一 一 一 一  
鳩 橋 の 飛 一 一 一 一 一 一 一 一  
か ち ま 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
鳩 橋 の 意 代 や 柳 子 一 一 一 一 一  
鳩 橋 や 竹 の 葉 一 一 一 一 一 一 一  
う ち ま 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

鶉 氏 送

白 氷 一 昇 檝 外 有 如 風 花 扇 女 風 泉 淇 山 淇 園 文 禮 芳 律

雁根ふきの埃くわぬや鶴の毛  
鶴の毛照うきまじり日如うき  
牛の角守まをたる家や雛の毛  
鶴の毛の毛や庭やう鳥居り  
雛の毛の角守の毛の尾も掃除好  
鶴の毛の毛の毛の毛の毛の毛  
ちの毛の毛の毛の毛の毛の毛  
呪咀よゑの毛の毛の毛の毛の毛  
鶴の毛の毛の毛の毛の毛の毛  
限りある毛の毛の毛の毛の毛  
鶴の毛の毛の毛の毛の毛の毛  
赤の毛の毛の毛の毛の毛の毛

秀 羽 前 上 松  
秀 松 雙 晚 芝 吳 塔 大 儿 寸 貞 井 秀  
谷 庵 松 芳 堂 和 泉 寺 山 翠 松 秀

鶴の毛の毛の毛の毛の毛の毛  
鶴の毛の毛の毛の毛の毛の毛

推 實

山里やまの毛の毛の毛の毛の毛  
推の毛の毛の毛の毛の毛の毛  
推の毛の毛の毛の毛の毛の毛  
推の毛の毛の毛の毛の毛の毛  
推の毛の毛の毛の毛の毛の毛  
推の毛の毛の毛の毛の毛の毛  
推の毛の毛の毛の毛の毛の毛  
推の毛の毛の毛の毛の毛の毛  
推の毛の毛の毛の毛の毛の毛  
推の毛の毛の毛の毛の毛の毛

文 羽 上 毛  
文 羽 檣 樵 樵 樵 樵 樵 樵 樵 樵 樵 樵  
禮 緝 檣 檣 檣 檣 檣 檣 檣 檣 檣 檣 檣 檣





梅嬌

多き未好日一翻一也梅嬌  
念先の青雲海一梅の記  
昇りり子帯の照布梅嬌  
葉の秋の色ふあられ梅の事  
羞きをさるる笠ののち梅嬌  
精進ののたふおくり梅の記  
葉をかしある活葉也梅嬌  
を月のも物子給れ梅の事  
只一とありり秋也梅の記  
善小似一日のさし梅嬌  
ちら葉ちれ葉ふちる梅嬌

言 曲 袖 桂 風 聽 淇 嘉 品 泊  
笠 眈 梅 吟 好 泉 山 峰 人 翁

美しき表さうけい色あり梅嬌  
ふ登りし夕日一人梅の事

真 芳 唯 松 友 儿 文 有 芳

念の本ち新

ちる名の本筆持ちのら梅あり  
惜むるものちるものちるもの  
たのしみも秋もふちるもの  
細きを袋の上也 念の本ち新  
をいひとありしを看くちるもの  
湧如れをもちるもの名女ある  
ちるものちるもの本ち新

雜 秋

何となく秋もさし梅嬌

松 緋 風 山 園 儀 律 風

ふるものんつゝくねあゝ秋の寂  
回方物をもゆきと然り 里々秋  
都々も秋のあまらん 山の陸  
直米 秋の日脚のき 正程  
新あとも清もとすけと秋の空  
野の秋や 月もも耳ももそをれす  
人の音も勇まきなり 豊々秋  
秋のわが色ともんてまのち物  
いほきまの秋の馬うん 富士の山  
ゆいまを垣根も秋をうら表  
秋林 新雪の里々水の音  
里々や豊々秋の 清みり

信濃 磐城  
寺 扇 春 文 友 幸 好 舞 好 舞 好 舞  
川 風 雨 園 山 里 中 欣 幸 欣 幸 欣  
玉 桂 竹 羊 欣 中 欣 幸 欣 幸 欣  
庫 文 文 文 文 文 文 文 文 文 文

新刊

吹音も 秋の園々 芦の風  
持る夜も 秋を清き秋の空  
秋々も秋のちやる書 嵐山  
碧塗のよももかとも 秋のさき  
秋のの 習うてきと筆の徳  
そりとも終れ秋の馬き状  
林 とも筆の終れら 廣の秋  
海ら秋を秋のさきなり 村雀  
新も壇も肥なり 里の賑

神留守

出留もきと 物もハき 神の前  
出留もきと 物もハき 神の前

羽 羽 羽 羽 羽 羽 羽 羽 羽 羽  
城 城 城 城 城 城 城 城 城 城  
山 山 山 山 山 山 山 山 山 山  
友 友 友 友 友 友 友 友 友 友  
文 文 文 文 文 文 文 文 文 文  
古 古 古 古 古 古 古 古 古 古  
私 私 私 私 私 私 私 私 私 私  
美 美 美 美 美 美 美 美 美 美  
筒 筒 筒 筒 筒 筒 筒 筒 筒 筒  
吳 吳 吳 吳 吳 吳 吳 吳 吳 吳  
儿 儿 儿 儿 儿 儿 儿 儿 儿 儿  
羽 羽 羽 羽 羽 羽 羽 羽 羽 羽

新刊

字物まの宮身や神のまゝ  
殊ふり日のまゝ神の留守  
留守のまゝ暮し人まゝ神の家根  
まゝの信所しるまゝ神の留守  
は留守のまゝ似ぬ社の早とほ  
掃くまゝはくまゝ神の留守の庭  
は身洗ふ月も寝たり神の留守  
掃除まゝ針子用を神の留守  
新ハ松のまゝ力も神の留守  
常僧まゝくらまゝホまゝ神の留守  
は留守のまゝ系も神の留守  
掃除してあれまゝ神の留守

古  
蘭  
清  
素  
里  
梅  
宝  
石  
未  
晚  
梧  
花  
仙  
雨  
梧  
白  
山  
元  
山  
高  
院  
松  
栖  
旗

下  
三  
三

小社を嵐も恒も人の神の留守  
祢宜達の謡ひねひや神の留守  
は留守のまゝ能くやうなる神馬掛  
程度くあゝまゝ神の留守

達  
一  
忌

達一忌や怪く形なる寺男  
達一忌や法々々々々池の芦  
達一忌や佛子柑の餅しきの時  
はくまゝ忌を月も寝たり壁の穴  
達一忌や扉のまゝ信  
達一忌やあゝくまゝの庭禪豆  
まゝの忌や客もまゝをまゝ

秀  
竹  
白  
芳  
高  
梧  
風  
輝  
富  
嶽  
白  
氷  
谷  
仙  
人  
峰  
泉  
松  
貴  
琴  
水

下  
三  
三

遠く馬や松の風の耳をさす  
はるばるや今新着神々の夢  
遠く馬や眼を閉てゆく松の  
遠く馬や大根を傳へるも  
遠く馬や拂子にけり松の  
あるまゝや餅垂たけいさ  
遠く馬や行ひまじり

十夜

遠く馬や松十夜わく  
よい月を掃くも  
花雨のさすも  
あはれ人と相をかり

松 月 申 園 碧 川 北 小 芳 唯 唯 風 風 好 風 本 園

能い連の道より  
年暮れを憂ふも  
念佛より  
串柿を  
子を抱く  
月も  
松風の  
帰り  
まよひ  
十夜  
更

松 月 知 有 繁 松 錦 糸 兒 堂 吳 堂 杏 堂 三 山 才 芳 左 原 松

能い嫁を元て毎日十歌  
ついで昔活りも十歌  
和ふらうの別活りも十歌

冬心籠

籠ても居られぬ冬も  
世遠入のほそく  
晴らぬ冬も  
暮の輝く  
茶道奥  
月気  
春の墓

江古松  
古律  
一唯  
淇山  
桂月  
友山  
香  
樵

月気  
冬籠  
心籠  
伊せ  
控向  
不意  
活籠  
なす  
籠り  
細る  
幼孫  
とる

上毛  
几  
士  
油  
呉  
素  
黙  
梅  
北  
寸  
松  
芳  
葉  
行  
梅  
電  
漱  
史  
香  
川  
芳  
律

豊前  
東京

下読

愈々これ風物をもとをくもを新

紙衣

せき金何下一紙衣の着振は  
紙衣着て追衞のしき叫いれ  
古くてもいや一けの多記紙衣は  
着心をくふしとらる帝衣を  
月色も紙もきらせ一紙衣は  
着てんもく候て是ら紙衣は  
紙衣着て是紙衣を庭あり  
家ハるも儂くして軽き紙衣は  
紙衣着て徳子ほあらぬ病に  
着るるも濡るもさる紙衣は

文 禮  
未 曉  
曉 翠  
曙 鵲  
碧 水  
歲 奉  
吉 道  
筒 侯  
申 國  
吳 雪  
柳 系

暗く着て飾りもさ紙衣は  
紙衣着てきりぬらぬ安らる  
袴着る勅力やきく紙衣は  
是まきく着切者のある紙衣は  
筆のせてある紙衣の袖は  
碑の下掃きぬる紙衣は  
紙衣着て年の奇くくく  
いろく物着る紙衣は  
すい紙一町一町も古紙衣  
腰伸てよる年紙衣は  
孫婿下着て笑つ紙衣は  
紙衣着て老の仲間一這入り

公 木  
松 月  
風 泉  
美 白  
竹 竹  
東 海  
塙 樹  
几 堂  
卓 川  
近 山  
玉 桂  
友 山

着神のいさゝ音をる 紙衣のれ  
着の事 紙衣着てまじり来  
着別居てゆる日も寝付けぬ紙衣が  
軽いの、老の音の音の紙衣が  
吹き返る炭の埃の埃の紙衣  
輪の香の茶の知の子の紙衣  
送るてゑる紙衣の紙衣の紙衣  
縮緬の 縮緬の紙衣の紙衣

納豆汁

香 嶂 月 燭 其 其 凉 真 文 芳 梧 松 檜 杉 露 芳 露 芳 露

旅僧のいさゝ音をる 紙衣のれ  
川舟のいさゝ音をる 紙衣のれ  
あはれめて二層目毛指 納豆汁  
管行と成て仕舞の紙衣汁  
まて何の葉の紙衣汁  
納豆汁の汁の紙衣汁  
納豆汁 柿香の紙衣汁  
入るまの紙衣汁

毒 晴

如 羽 鞆 樵 馬 梅 芳 尋 芳 寸 芳 寸 芳 寸 芳 寸 芳

下 壺



山知也 心ゆく春茶もしの静  
 暮る月を惜しむ春の宿住舞  
 春茶や 暮更の 灯の元もさゆ  
 夕時や 長い日 静を 暮れ  
 春茶く 又新く 暮れ 暮れ  
 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ  
 夕時や 往々 田舎の 旅十日  
 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ

茶の花

好 文 芳 古 暮 長 竹 桂 柳 梅  
 電 風 禮 緯 山 我 年 竹 月 下 帝

茶の心や 泳めりあけの 好字 静の 里  
 茶の心や 都を 暮れ 暮れ 暮れ  
 茶の心や 垣の 暮れ 暮れ 暮れ  
 茶の心や 上ふ 暮れ 暮れ 暮れ  
 茶の心や 思れ 暮れ 暮れ 暮れ  
 茶の心や 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ  
 茶の心や 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ  
 茶の心や 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ  
 茶の心や 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ  
 茶の心や 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ  
 茶の心や 暮れ 暮れ 暮れ 暮れ

不意の花

芳 和 品 樗 釣 竹 左 淇 黙 手 桑  
 緯 淑 人 雅 翁 風 園 史 我 里

筆池の澄み日和や 石露の光  
ちりちりまき日思ゆきつとせむ  
院とて思ふも 石露の盛るうれ  
斜日とてやまきくうまて石露の光  
松風もあてぬまや 花とては  
ほのちりちりまき水うけり 石露の光  
石露の光や夕日のうらら 書院先  
曇うらら 結き日 濁りや 石露の光 上七  
清子とて 掃りうらら 石露の光  
垣端うらら 掃りうらら 石露の光  
人のまて 石露の光 掃りうらら 石露の光  
近きれ 掃りうらら 石露の光

唯 以 一 有 祥 貫 逸 都 羽 嶺 未  
風 香 儀 松 山 水 門 檜 琴 年 曉

欵々の色も 掃りうらら 石露の光  
志益まけ日のまき 掃りうらら 石露の光  
結らもあて 掃りうらら 石露の光  
照海子掃りうらら 掃りうらら 石露の光  
まきまき 掃りうらら 掃りうらら 石露の光  
本後まき 掃りうらら 掃りうらら 石露の光  
油垣まき 掃りうらら 掃りうらら 石露の光  
飛石の印まき 掃りうらら 掃りうらら 石露の光  
おれたまき 掃りうらら 掃りうらら 石露の光  
まきまき 掃りうらら 掃りうらら 石露の光

芝 點 曲 筒 淇 岸 涼 蘭 芳 文  
山 史 朧 溪 園 楓 松 子 律 禮

山家時雨  
早き山の家

月 靜

時雨とくく戸を繰る山屋浦  
 山家と六常と接するところれ  
 時多しや中冠する山の家  
 垣根も傳時多しうらぬ山を  
 里子日おきえて時多し山家  
 糝の向く向山の山時雨は  
 ちくちくや廻り時の一軒家  
 峯傳ふや山家と江時多  
 山家とく又遊る二層の時多  
 時多しや松の音傳ふ山の家  
 葉集りて時雨懸る山家と申  
 ちくちくやその埋むる山の家

上弦

桂月 古仙 鐘吟 塚村 吳羊 成路 樵翁 曲朧 孤峯 椹雅 片ら

山家の音傳ふ山家と申  
 時雨とくく戸を繰る山屋浦  
 山家と六常と接するところれ  
 時多しや中冠する山の家  
 垣根も傳時多しうらぬ山を  
 里子日おきえて時多し山家  
 糝の向く向山の山時雨は  
 ちくちくや廻り時の一軒家  
 峯傳ふや山家と江時多  
 山家とく又遊る二層の時多  
 時多しや松の音傳ふ山の家  
 葉集りて時雨懸る山家と申  
 ちくちくやその埋むる山の家

神樂

東京  
 香高 我我 文文 芳芳 古古 全全 可可 若若 全全  
 尋孝 岸喜 文芳 古全 可若 全全

下弦

能い通傳と人のうらやむ神楽

里神樂

里神樂の候の白ひくれ  
稲架もとれてふいり中里神樂  
歌神樂や面を舂せ六知人  
着い流の羽織掛ひや 里神樂  
歌の夕くらやまのしらぬ櫛櫛  
里の庭は笠跡うてぬる神樂  
松の目ハふる能 里神樂  
歌神樂や小村の白の人の歌  
まのころら歌よもあはる神樂

東京

枯尾花

芳 律  
伯 志  
子 歌  
去 我  
油 梅  
木 元  
蘭 鳳  
梅 雨  
芳 新  
律

水も新光りてき 枯尾花

東京

近もれハ軽ひもあ 枯尾花

江

尖りたるやうな風ありけれ尾花

上 松

枯果 尾花のしらき 枯尾花

白 水

はらへて海も水や 尾花

上 毛

年々も種々かたは 尾花

竹

垣廻りもささひら 枯尾花

庫

懐く 枯山らもあはる尾花

儿

風の筋のめすあは 枯尾花

近

枯神々月らのあはる尾花

眩

初と節子あはる 尾花

申

聖の園は夜もささひら 枯尾花

晚

青 宜  
江 春  
松 年  
白 水  
竹 葉  
庫 文  
儿 堂  
近 山  
眩 月  
申 國  
晚 翠

高里のくさくさきき 枯尾花  
桂男のよききき 枯尾花  
追うて来て免ハくさくさ  
風軽く吹く 尾花の枯尾花  
さうききたり 枯尾花

きき 菊

きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ

梧 未 暮 一 梧 帝 芳 文 富 扇 芝  
栖 曉 雨 暮 風 峰 緯 禮 貴 山

きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ  
きき菊や 芳て芳ていよまをひ

炭 竈

炭竈の煙りも旅り力あり  
すくすくや 煙りも旅り力あり  
炭竈の煙りも旅り力あり  
炭竈の煙りも旅り力あり  
炭竈の煙りも旅り力あり  
炭竈の煙りも旅り力あり  
炭竈の煙りも旅り力あり  
炭竈の煙りも旅り力あり  
炭竈の煙りも旅り力あり  
炭竈の煙りも旅り力あり

柳 杏 庫 寸 芳 文 桂 友 和 古 井  
糸 毒 文 芳 律 禮 月 山 有 松 竹

炭竈や赤く煮あがり 雲むし  
 是鬼の山は雪や 炭くさ  
 炭くさや雪の中へ 下りて来る少  
 炭竈や 猪道ふ 人の宿ふと  
 すくちや中やさうものやを煙り  
 ま空よ 尾けあふ 炭くさ  
 炭竈を 覗く みるや なる  
 炭竈の 煙りや 霜を とも  
 すくちやや 煙の さい 流る 宿  
 炭竈や 雪を 煙の 度  
 炭くさ 煙の 下り 小

冬所雪

横濱

逸 士 黙 告 祥 淇 其 其 芳  
 氷 行 夫 貞 松 園 尾 獨 漱 禮 律

橋立や 風を 凜ら 如き 如  
 花とる 子中の 雪や 芳 山  
 富士の 根を 纏く や 三保の 雪  
 黒谷ハ 名を 雪の 影 如  
 雪の 影や 浮ん 如き 外 生  
 をくちや 上 雪の 影 雪  
 明き 雪を たり 如き 雪  
 渚 結らん 景色や 佐野 雪  
 馬よ 通る 雪の 左 富士  
 松島 雪の 如き 雪  
 如き 雪や 雪の 如き 雪  
 雪の 影 雪の 影

玉 吳 左 左 峩 眩 友 務 告 希 私 古  
 桂 羊 琴 自 山 栖 魚 時 漱 松

正徳

正徳

武井野子ありし好夢よりはるる香  
見阿うさん言ありし如く山函り

氷柱

棚あれて為るもさう氷柱の如  
きしつて形ありしを氷柱の家  
腰裏の氷柱より少くも細くも  
深みす海立のやうな氷柱の如  
りし形より月の影に似たりし  
楠の雨うらたて岩の如く柱の如  
身の端むね申すに伸たる氷柱の如  
影の白とたるとりのあるはらうる  
空送り竹の影も氷柱の如く

羽後

芳文 吟風 清木 桂有 香古 友山 庫文  
律 禮 泉 梧 翁 儀 峰 山 文

朽て来下たき成るる氷柱の如  
院中の廣くうらたて氷柱の如  
りし形より月の影に似たりし  
滝水の如く稍よりつらうる  
戸の如く、壁の如く、映る氷柱の如  
其多き根の氷柱の如く、透す月影の  
氷柱の如く、節の如く、氷柱の如  
りし風の如く、伸たる氷柱の如  
月影の如く、伸たる氷柱の如  
りし形の如く、伸たる氷柱の如  
きもの如く、伸たる氷柱の如  
体りたる氷柱の如く、伸たる氷柱

芳文 吟風 清木 桂有 香古 友山 庫文  
律 禮 泉 梧 翁 儀 峰 山 文

月と家ありまのちきりきり  
着るくれておもしろききり  
是れ月ひりけりてきり海の上  
月ひりてあつちをまをま  
京よりてててて同くさつは  
さのきりてててててて  
流たれとてててててて  
望まの都あり船くあり人  
追ててたりやまのきり  
神とて大きく切りおきり  
又別のきりきりあり好船あり

素本一合聽法湛月唯真夢  
白風鳥泉橋山靜風松宜

客を管ありて元のきり  
市中を人々ありきり  
着ま福元もわたりきり  
戸を空てお出りおのきり  
富士をてん中心の締るきり  
なまひまをすりてけり  
雲家のねま眼のほくきり  
魚雲おれよみ舞きり  
水煙りさるきりきり  
けりておもしろい堤のきり  
家ひりり橋ありきり  
井の新障ありきり

高橋 羽後  
松 菅 風 好 柳 下 木 山 山 香 峰 麦 雨 友 山 里 公 木 香 扇 古 仙 榎 松 樵 翁



そよ風の減て新船のまじりし  
そら空のまじりし月影の  
大船の山ありてまじりし月影の  
まじりし月影の  
酒の徳四一してまじりし月影の  
怒刺して後まじりし月影の  
道車りの減てまじりし月影の  
客のまじりし月影の  
酒のまじりし月影の

聯

羽前  
法如  
芳輝  
梧淇  
左吳  
晚默  
歲  
ら風  
緯月  
栖園  
言  
翠文  
年

脛のまじりし月影の  
紅脛裏の古手はつらつら  
脛のまじりし月影の  
人あらしめ脛のまじりし月影の  
脛のまじりし月影の  
脛のまじりし月影の  
脛のまじりし月影の  
脛のまじりし月影の  
脛のまじりし月影の  
脛のまじりし月影の

輓

芳末  
几幾  
嶺嶺  
嶺嶺  
嶺嶺  
嶺嶺  
嶺嶺  
嶺嶺  
嶺嶺  
嶺嶺

戦は子も子も 一も 一も 一も  
戦も苦ももせぬも 一も 一も 一も  
あかしてや芳也も踏く 一も 一も 一も  
戦の多もも踏多も 一も 一も 一も  
戦とくひもあつとく 一も 一も 一も  
何ううの多も踏多も 一も 一も 一も  
戦も和 一も 一も 一も  
能く道も踏多も 一も 一も 一も  
戦もはくも一も 一も 一も  
戦も和 一も 一も 一も  
戦も早 一も 一も 一も

巨燧

上毛  
吟 月 法 可 奇 樵 黙 芳  
風 静 恬 笑 我 琴 扇 文 子 律

巨燧も一も 一も 一も  
孫心ハ多の多もせぬ 一も 一も 一も  
旅多也も多も 一も 一も 一も  
家持の多も 一も 一も 一も  
精上付く 一も 一も 一も  
立ち上り 一も 一も 一も  
火の多も 一も 一も 一も  
野多も 一も 一も 一も  
何れも 一も 一も 一も  
海も 一も 一も 一も  
一も 一も 一も

巨燧

羽後 松 吟  
信濃 竹 月  
常陸 我 葉  
武彦 山 智  
美 海 山 智  
仙 美 海 山 智  
柳 系 漢 室 美 海 山 智  
英他 柳 系 漢 室 美 海 山 智

誰も来てあられ巨燿のぬき居ん  
旅の苦もあつゝ ちかぢかぢか  
孫と来て孫をよむれぬ巨燿  
脂のゆき巨燿をぬき居ん  
眼を借し嫁のぬき巨燿哉  
身もぬき嫁のぬき巨燿哉

埋火

埋火の 燐気煙多ふゆえられ寸  
森忘れつつの埋火もなごり  
埋火の 燐気煙多ふゆえられ寸  
埋火の 燐気煙多ふゆえられ寸  
埋火の 燐気煙多ふゆえられ寸

未 淇 鉤 涼 芳 好 桂  
院 園 翁 松 薰 緝 松 電  
以 輝 好 芳 涼 芳 好 桂  
如 前 如 前 如 前 桂

埋火の 自在のお湯の竹加減  
埋火の ぬき居ん 燐気煙多ふ  
埋火の 燐気煙多ふゆえられ寸  
埋火の 燐気煙多ふゆえられ寸  
埋火の 燐気煙多ふゆえられ寸  
埋火の 燐気煙多ふゆえられ寸  
埋火の 燐気煙多ふゆえられ寸  
埋火の 燐気煙多ふゆえられ寸  
埋火の 燐気煙多ふゆえられ寸  
埋火の 燐気煙多ふゆえられ寸

木 兔

告 若 琴 石 晚 曲 昂 辨 寸 芳  
壺 旗 嶺 山 屯 翠 腕 石 月 芳 律

埋

歎ハ本鬼のまぢやう之吉榎  
 本鬼の啼やつりしり鶴の姿  
 終歎もりしり終きん本鬼の声  
 本鬼のや翻れさうなる早のり  
 みつるやなうられさうら小半日  
 本鬼や馬の嘯しりしきうへる  
 程清きほれ月も本鬼の声  
 縁の子や終りてつや本鬼の意  
 本鬼のや月をたすうに廻る山  
 門番の鼻の上や本鬼の声  
 本鬼啼て林しりる月新の  
 森の灯はかまけし洩て本鬼のこゑ

歳 芝 晚 杏 永 祥 古 和 風 湛 蘭 唵  
 年 山 翠 壺 浦 松 仙 有 泉 山 雨 風

月落て歎ハ未く海 本鬼の舌  
 本鬼の初をくられ 本鬼の舌  
 涙きりて清い月新や本鬼の声  
 神の灯は清得歎海 本鬼の声  
 本鬼引や里の景色を眼もつて  
 みつるの啼や雪もつておられす  
 啼たのハ月新のさうら 昼の本鬼  
 耳をき本鬼のう 返す 枕うた

枕書

上弦  
 可 蕉 原 松 其 芳 文 蘇 杉 岸  
 我 山 雨 松 声 獨 緯 禮 元 寺 楓

下弦

浪舟のたはれきるや 笠巻のうら  
 葉一や笠巻のうら 雲の晴の中  
 二羽とて笠巻のうら 雲の晴の中  
 松影を 雲のうら 雲の晴の中  
 余のうら 雲のうら 雲の晴の中  
 笠巻の月をすかしく 流るる  
 月代や入江のうら 雲の晴の中  
 殊もよ 雲のうら 雲の晴の中  
 憚りうらぬ 雲のうら 雲の晴の中  
 雲のうら 雲のうら 雲の晴の中

芳 文 其 泊 松 筒 長 春 阜 法 友 仙  
 緯 禮 允 扇 声 溪 言 我 川 梧 山 美

細代守

孝行をよよすのうら 雲の晴の中  
 雲のうら 雲のうら 雲の晴の中  
 親のうら 雲のうら 雲の晴の中  
 只今事たる 雲のうら 雲の晴の中  
 親の月を笠巻のうら 雲の晴の中  
 殊もよ 雲のうら 雲の晴の中  
 島山とて 雲のうら 雲の晴の中  
 細代守 雲のうら 雲の晴の中  
 細代守 雲のうら 雲の晴の中  
 細代守 雲のうら 雲の晴の中

有 儀 月 静 森 崎 疎 泉 聽 山 里 高 橋 杏 月 桂 香 峰 磐 永 嶺 嶺 嶺 嶺



月代川 時を待たせぬ 今  
潮を待たせぬ 今

寒念佛

冬人の氣程 寒念佛  
肌を志す 寒念佛  
靴を志す 寒念佛  
衣を志す 寒念佛  
灯火を志す 寒念佛  
入りの月を志す 寒念佛  
祀する 寒念佛  
怨みの心を志す 寒念佛  
山を志す 寒念佛

古 松  
昔 律

未 曉  
遠 水  
卓 川  
近 山  
可 山  
樵 翁  
友 山  
蘭 雨  
淇 山

池の音を志す 寒念佛  
明星を志す 寒念佛

師走

官の病を志す 寒念佛  
能い人を志す 寒念佛  
冬を志す 寒念佛  
酒を志す 寒念佛  
雪を志す 寒念佛  
梅を志す 寒念佛  
旅人の心を志す 寒念佛  
川を志す 寒念佛

原 松  
芳 律

唯 風  
美 泉  
貞 白  
寄 川  
本 風  
左 左  
以 者

之を走らば門を以て走るの黒木黄  
いしんや信譽らすは是の以て走る也  
押はるるゆゑに師を以て走る也  
懐はうれゝるも師を以て走る也  
人の多く用ひるもの重なるも  
許すの梅は中かゝる師を以て走る  
鈴鹿の門を以て走る也  
仕立屋の計りて走る也  
世の中やまゝに走る人少し  
形ありて梅を以て走る人少し  
懐はる状や以て走る也  
流次は梅を以て走る也

如 文 友 静 潤 晴 盤 几 壺 詠 籍  
風 園 山 歎 梅 月 松 堂 我 村 嘯 年

徒連の普請を急ぐ師走の日は  
涼なる年の世に記しき師走の日は  
世の終りて走る也  
柿椿人の師走を以て走る也  
田嶋の師走を以て走る也  
新八楸の師走を以て走る也  
鞆の師走を以て走る也  
寄りの師走を以て走る也  
ひまわり余りて走る也  
引く用を以て走る也

楳 梧 棋 全 全 申 晚 涼 多 蒼 芳  
柵 園 山 國 翠 蕙 宜 兩 律 高

年本樵

降るるを以て走る也

東京

高

年本樵



門口の世をまほしき心とてあう子  
意らぬ門市山を想ふとて本  
鏡中情彩端よあまう年あう如  
仕来りの積六子山めとて本樵  
葬事傳添つて婦き年あう  
病分よあうとて女鏡とて本  
和子似て清まやうなり年本樵  
嬉上て之れハ香のあう年あう年  
念のく来ひやうあう年あう年  
遠よりりて庭よつたうやう本  
年本樵とて用のすむ山家う子  
小室よも嬉子年あう小山

上七  
睡 卓 琴 歳 趙 永 未 森 梧 貫 祥 點  
痴 川 芳 琴 舟 嘯 曉 峰 山 松 史

想ふとてわが海の家を記年あう  
想ふとて山子作の付たるとて本

掛乞

掛乞の如うらぬ世柄とて本  
掛乞の如い海とて本  
掛乞とて来りて智けき歌う如  
掛乞の二層の心橋とて本  
掛乞の来りて毒うらや業  
来りて戸や掛乞うらき候  
想ふとてハ掛乞ならん苗守の家  
掛乞の如い舎うらぬとて本  
掛乞の如い柳とて本

羽前  
文 禮 芳 律 唯 鳥 一 鳥 月 靜 齋 峰 清 梧 如 如 好 白  
水 中 風 風 梧 峰 靜 鳥 風 律 禮

掛之や浮世の義理のさうね振  
 掛之や歌の借林のさうね  
 掛之や身付のて漕の海  
 掛之や入丁きりりり仕舞風呂  
 掛之や言て扇つて昼の飯  
 掛之や海へてきりぬり茶  
 掛之や隣の前守をばつり  
 掛之の朝法所さきや 灯足  
 掛之や南守の城布よ軽き  
 掛之や世をききき通るり  
 掛之や隣り持のぬりやす

冬述懐

淇園 點史 吳雪 筒溪 杏貞 士行 晴月 可山 涼蕙 芳律

風を舞うるきて安やす火桶これ  
 梅の世の春りもさゆる城角のね  
 老りれー侍仲のさゆる深敷の酒  
 冬の朝ハオホくえりー鐘の交  
 都の冬候く寒日ありつり  
 冬さぬや昔を語る座の客  
 世をいへりさのいへりぬり  
 鬢もさくー素衣さきさか増る歌  
 傾珠の舞侍窓のさきさき  
 接ぎ竹や毎日金所の餅の音  
 竹のうへる鶴ハさぬれと葉の  
 親の為子たたきさるる縁と汁

唯風 柳下 貞身 文園 友山 好雲 仙美 森琴 仝 暮我 柳所 未曉

猪の尾も赤黒く  
うしろ向く鏡もききく  
痛く外ハ痛く  
筆を走ひ怒ハ伸  
老より巨燧を好  
子あり

年の尾

年の尾やひと  
と一尾や細の眼  
年の尾や世を  
年の尾より川  
年の尾と海り  
と一尾の世ひ

江 其 芳 文 未 告 俱 梧 空 一  
者 獨 祥 禮 晚 屯 栖 海 多

年の尾や  
年の尾を書き  
と一尾を合  
年の尾や長  
年の尾や船  
年の尾よ  
と一尾や靴  
年の尾は  
年の尾や梅  
年の尾や梅  
年の尾や梅

松 苜 趙 石 仙 富 多 晴 塙 宜 涼 芳  
号 仙 舟 美 貴 我 月 村 高 松 律

香<sup>リ</sup>たちちよき来る<sup>ル</sup> 波<sup>ノ</sup>や稻<sup>ノ</sup>の屯  
 ひかり隈なく<sup>ク</sup> 月<sup>ノ</sup>のころ<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup> 三河  
 蓬<sup>ノ</sup>芳  
 紅葉<sup>ノ</sup>綱<sup>ノ</sup>ら<sup>ニ</sup> 市<sup>ノ</sup>は<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>と<sup>ク</sup>  
 急<sup>ク</sup>わ<sup>カ</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>ノ</sup>何<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>辨<sup>ノ</sup>宜<sup>ノ</sup>合<sup>ノ</sup>  
 書<sup>ク</sup>み<sup>ル</sup>く<sup>ク</sup>ち<sup>ノ</sup>ふ<sup>ル</sup>一<sup>ノ</sup>筆<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>先<sup>ノ</sup>  
 雀<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>機<sup>ノ</sup>嫌<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>なり<sup>ノ</sup>  
 焚<sup>ク</sup>火<sup>ノ</sup>して<sup>ノ</sup>壁<sup>ノ</sup>乾<sup>ク</sup>する<sup>ル</sup> 新<sup>ノ</sup>建<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>  
 世<sup>ノ</sup>話<sup>ノ</sup>好<sup>ク</sup>も<sup>ノ</sup>亦<sup>ノ</sup>寺<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>具<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>  
 甘<sup>ク</sup>い<sup>ノ</sup>物<sup>ノ</sup>嫌<sup>ク</sup>ひ<sup>ノ</sup>き<sup>リ</sup>と<sup>ク</sup>酒<sup>ノ</sup>飲<sup>ク</sup>ま<sup>ル</sup>ん

律字 律字 律字 律字 律字 律字 律字

何<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>思<sup>フ</sup>日<sup>ノ</sup> 惚<sup>ク</sup>甘<sup>ク</sup>子<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>  
 長<sup>ク</sup>中<sup>ノ</sup>舞<sup>ク</sup>は<sup>ノ</sup>果<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>か<sup>ク</sup>ら<sup>ニ</sup>お<sup>ク</sup>人<sup>ノ</sup>あ<sup>ク</sup>ら<sup>ニ</sup>  
 暑<sup>ク</sup>い<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>あ<sup>ク</sup>ら<sup>ニ</sup>い<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>う<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>記<sup>ノ</sup>  
 夢<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>や<sup>ク</sup>す<sup>ク</sup>み<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>門<sup>ノ</sup>回<sup>ク</sup>に<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>て<sup>ク</sup>  
 握<sup>ク</sup>る<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>信<sup>ノ</sup>ゆ<sup>ク</sup>も<sup>ノ</sup>社<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>領<sup>ノ</sup>  
 七<sup>ノ</sup>不<sup>ノ</sup>只<sup>ノ</sup>議<sup>ノ</sup>別<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>お<sup>ク</sup>思<sup>ク</sup>海<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>お<sup>ク</sup>道<sup>ノ</sup>理<sup>ノ</sup>  
 入<sup>ク</sup>降<sup>ク</sup>な<sup>ク</sup>れ<sup>ク</sup>時<sup>ノ</sup>は<sup>ノ</sup>専<sup>ノ</sup>入<sup>ク</sup>一<sup>ノ</sup>照<sup>ノ</sup>  
 待<sup>ク</sup>て<sup>ク</sup>下<sup>ク</sup>所<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>初<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>雨<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ク</sup>り<sup>ノ</sup>  
 墨<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>滲<sup>ク</sup>む<sup>ク</sup>こ<sup>ノ</sup>紙<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>く<sup>ノ</sup>  
 た<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>利<sup>ノ</sup>茶<sup>ノ</sup>は<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ク</sup>ら<sup>ニ</sup>あ<sup>ク</sup>ら<sup>ニ</sup>  
 大<sup>ク</sup>工<sup>ノ</sup>き<sup>ク</sup>い<sup>ク</sup>も<sup>ノ</sup>功<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>す<sup>ク</sup>す<sup>ク</sup>  
 家<sup>ノ</sup>智<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>前<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>久<sup>ク</sup>一<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>高<sup>ク</sup>に<sup>ノ</sup>飛<sup>ク</sup>て

律字 律字 律字 律字 律字 律字 律字

透る〜た透ちかたれより  
深谷の葉も傳熱の音もらん  
金も歌も味方ももたれ  
年を惜〜善くするのちみ様し  
因海〜ゆ〜船も初〜や  
人言似もよ〜るお〜る  
遠看〜〜言れ〜馬〜あ〜  
幸に月傳豊好 旅の空  
吟も傳の葉も海もあ  
古里もおの〜るなる 秋の寂  
借〜羽織の女おみ〜  
何事も人傳せよ〜

字律字律字律字律字律字律

飄の勢も 袖も 不〜  
傾音も〜七日に 暖あ〜  
笑ひ〜〜 冬 近 山

字律字律

水仙や〜〜 空の色  
浮傳も〜〜 氷る短水  
文書よ向ひ 砚の蓋〜  
茶臼の音を 隣あり〜  
里〜もおの〜る 月〜寂  
秋の深〜 踏〜半

字律露 字律露

東京

眠 芳 白

三

圓栗も栗も心くらの裁子入れ  
京育ちくく子等おやきき  
飾りなきに早くききゆる  
笑しき中たなきの琴  
掛られ涼しくもさすれ  
月の昇れ勢動く故に  
若く膝く車ちくらんは  
寺も左様もない寺町  
よるに集める家附の骨折れ  
各地の羽織を着古せし  
植くつら花もよりの心昔  
日和續きくし蚕の世揃ひ

羊 律 露 羊 律 露 羊 律 露 羊 律 露

湯居所にいてハ召船の多る  
神の幟を書し抑へ墨  
おろく櫓橋上戸の言知ひ  
似るおゆり傳も流石は  
慈航も袖湿らせて切み  
室煙の香も残るきぬ  
暫くも喰く時々の文か  
楯をゆする様をけ  
道連の力自慢も新し  
忘れし様をみ半あはれ  
月に名のある頼ハ抱く名を  
引くお唱子のなるお

羊 律 露 羊 律 露 羊 律 露 羊 律 露

新米を焚く一才の水加減  
 小言の中うけをうらむも  
 大の子に乳房をうけむるは  
 油煙のくまを記會屏幅帽  
 明好の中幕をうけむるは山  
 舞の扇をかきうけむるはか

新米を焚く一才の水加減  
 小言の中うけをうらむも  
 大の子に乳房をうけむるは  
 油煙のくまを記會屏幅帽  
 明好の中幕をうけむるは山  
 舞の扇をかきうけむるはか  
 羊 緯 露 羊 緯 露

明治廿六年十月十七日印刷  
 全 年 全 月 廿 四 日 發 行

東京南豊島郡戸塚村九下戸塚四丁目

編集者 大 館 兼 太 朗

全 所

印刷兼発行者 大 館 整 一

發賣 東京市日本橋區通三丁目 小林新兵衛  
 書林 全 京橋區南傳馬町二丁目 吉川半七

